

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02563

研究課題名(和文) アメリカにおける「慰安婦」の記憶表象 小説とモニュメントの考察

研究課題名(英文) Constructing the Memory of "Comfort Women" in the U.S.: A Study of Novels and Monuments

研究代表者

寺澤 由紀子 (Terazawa, Yukiko)

東京都市大学・共通教育部・准教授

研究者番号：50409439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：モニュメントと小説という異なる媒体を通しての「慰安婦」の記憶の再構築の在り方を、特にポストメモリーという視点から考察する予定だったが、グラフィックノベルや映画にまで研究対象を広げることができた。また、「慰安婦」像と日系アメリカ人強制収容の記念碑の比較分析を行うことで、同一媒体による異なる記憶の再現過程での記憶の抑圧・隠蔽についての考察を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化的産物に表象された記憶のみならず不可視化された記憶を探ることは、その文化的産物や歴史・社会的背景の考察に不可欠である。近年、「慰安婦」像だけでなく、様々な記念碑の設置や撤去をめぐる論争が起こっている中、本研究は、学術的探究に留まらず、現代社会において我々がいかに歴史を認識していくべきかを示唆する役割を果たしていると思われる。

研究成果の概要(英文)：My original plan was to examine the reconstruction of the memory of "comfort women" through monuments and novels, using the concept of post-memory. However, the scope of my research expanded to include graphic novels and films. Additionally, by conducting a comparative analysis between the "comfort women" statue and the Japanese American Memorial, I was able to explore the process of memory reconstruction and obliteration through the same type of medium.

研究分野：人文学

キーワード：「慰安婦」 ト라우マ 記憶表象 メモリアル ポストメモリー

1. 研究開始当初の背景

本研究に先立ち、「慰安婦」問題を扱った韓国系アメリカ人作家の小説二編（チャン・ネ・リー著 *A Gesture Life*、ノラ・オッチャ・ケラー著 *Comfort Woman*）における記憶表象の考察はすでに行ってきた。しかし、当時は小説内での記憶の再構築プロセスの分析に主眼を置いていたため、本研究では作家自身に目を向け、ポストメモリーを抱える者の想起の過程を対象とした考察を行うこととした。また、2010年に初めてアメリカで「慰安婦」像が立てられてから、アメリカ各地で像設立の動きが高まっている背景を受け、小説に加えてモニュメントを分析対象として取り入れた。

2. 研究の目的

アメリカという、被害の現場ではない場所で、同じ民族でありながら直接的にその記憶を体験していない者たちを中心に「慰安婦」の記憶の想起が行われていること、日本の植民支配の中で起こった出来事が、帝国主義の歴史を持つ別の国で再現されていることに着目しながら、記憶を再構築するプロセスと、その過程で起こる記憶の操作を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究の理論的枠組みとなるのが、トラウマ研究であり、中でもフロイトの隠蔽記憶の概念は重要な基盤となっている。その枠組みの強化を図るために、ジャネ、フロイトらによる記憶の理論を再確認するとともに、慰安婦像が視覚的なものであること、そして想起される記憶の持ち主が女性であり、韓国の父権制の中でも沈黙を強いられたことから、見るものと見られるものという二項対立的な眼差しの論理や、それに対するフェミニズム的見地を再考した。さらに、近年のトラウマ研究や記念碑研究の文献収集・分析も進めた。

(2) 本研究の大きな柱となるのが、アメリカ各地および韓国に設置された慰安婦像の現地調査および韓国の「ナムムの家」への訪問だった。像設置の経緯やそれに対する反応の文献調査を事前に行い、それをもとに、現地にて、像の管理団体や設置推進派・反対派および見学者へのインタビューを実施し、被害者の方々の声を直接聴くことで、韓国、アメリカそれぞれにおける「慰安婦」の記憶再現の在り方と影響の検証を行うのが当初の計画だった。しかし、研究期間開始直後から、個人的事由により十分な出張期間が確保できなかったことに加えて、新型コロナウイルスの世界的流行により、結局海外での現地調査をすべて断念せざるを得なくなった。そのため、当初の方針を大幅に変更したが、記憶表象の在り方の比較考察を行う上で、日系アメリカ人強制収容の記念碑、「慰安婦」問題を扱った映画およびグラフィックノベルを新たな研究対象として取り入れた。

(3) 現地調査結果をふまえて、リーとケラーの二作家へのインタビューを行い、「アメリカという、被害の現場ではない場所で、同じ民族でありながら直接的にその記憶を体験していない者」が行う想起のプロセスの考察をする予定だったが、それに替え、小説内での記憶表象の考察を深めることとした。本研究着手以前には不十分だったケラーの小説の考察に焦点を充て、特に小説内におけるシャーマニズムの役割について分析を進めた。それにあたり、韓国の文化、歴史、社会的背景について文献調査をし、知識を深めた。

4. 研究成果

(1) コロナ禍により研究計画の大幅な変更を余儀なくされ、小説とメモリアルという異なる媒体における同一記憶の表象という軸からはずれることにはなったが、メモリアルという同一媒体での異なる記憶の表象という別の角度での研究成果を、国際学会での発表（“Looking Beyond What Is Visible: How We Regard History through Memorials”）という形で残すことができた。異なる記憶とは、日系アメリカ人強制収容と「慰安婦」の記憶で、日系アメリカ人記念碑では、強制収容という負の記憶を提示する一方で、戦時下の日系人の愛国心が強調されていることで、アメリカの提示するメインストリームナラティブへの同化を招いており、「慰安婦」の記憶を表象する平和の碑では、日本の提示するナラティブへの同化を拒み、日本への抗議の象徴となっている一方で、少女のイメージや、その像が引き起こす二項対立的論争が、多様な犠牲者個々の存在を抑圧する働きを引き起こしていることを指摘した。本発表は、現在学会誌への投稿に向けて執筆の最終段階に入っている。

(2) 前述のとおり、予定していた現地調査はできなくなったが、コロナ感染拡大前は、学会や映画上映会、講演会に参加することができた。初年度に参加したサンフランシスコでの AAAS 年次大会では、像設立の中心となった活動家や研究者との交流、議論が可能となった。また、『雪道』、『主戦場』、『終わらない戦争』、『オレの心は負けてない』などの映画を鑑賞することで、映画における「言葉」と「動画」を通しての表象の在り方に視野を広げることができた。また、グラフィックノベル *Grass* の著者キム・ジェンドリ・グムスク氏の講演会に参加したことをき

かけに、グラフィックノベルを研究対象として扱う方向転換が可能となった。

(3) 国内外でのセミナー、シンポジウム、学会などがオンラインで開催されたことにより、従来型の開催であれば参加が不可能だったイベントに参加する機会を得た。特に、STAND at Yale による、「慰安婦」を題材とした一連のウェビナーでは、被害者の一人である李容洙氏から直接当時の体験や現在の活動の経緯を聴くことができ、また、別の集会では、平和の碑（「慰安婦」像）作家のキムソギョン氏、キムウンソン氏から、像制作経緯や像の象徴性についての説明を聴くことができた。これらの体験は、実地調査ができない中での研究を進めるうえで有益となった。

(4) 当初の研究計画からの変更の中で見出すことができ、分析を進めているものとして、以下が挙げられる。

(A) 「慰安婦」問題をめぐる論争の中心人物のインタビューがまとめられたミキ・デザキ監督作品『主戦場』を取り上げ、「慰安婦」の記憶が支持派と修正論者両者それぞれによっていかに可視化/不可視化されているかというだけでなく、その試み自体がどのように可視化/不可視化されているかについての考察。

(B) グラフィックノベル *Grass* を取り上げ、ホロコーストの記憶を扱ったアート・スピーゲルマンの *Maus* と比較し、記憶表象における視覚的イメージが果たす役割や、想起する記憶の違いが、想起する過程や表象内容に及ぼしうる影響の有無についての考察。

研究期間内に成果として残すことはできなかったものの、これら二点については学会発表に向けて調整を行っている。また、これらの映画、グラフィックノベルの考察をさらに進め、モニュメントおよび小説との比較分析をすることも今後の課題として見据えている。さらに、モニュメントの実地調査や関係者へのインタビューを実施し、それを踏まえて小説の再考を行うという、当初の研究計画を遂行することは、今後果たすべき目標である。こうした研究を行う上で、本研究期間内に参加した様々な研究会やシンポジウムおよび読み進めることができた文献（特に記念碑研究に関するもの）から得た知見は有効に活用できると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yukiko Terazawa
2. 発表標題 Looking beyond What Is Visible: How We Regard History through Memorials
3. 学会等名 The 10th Asian Conference on Education & International Development (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------